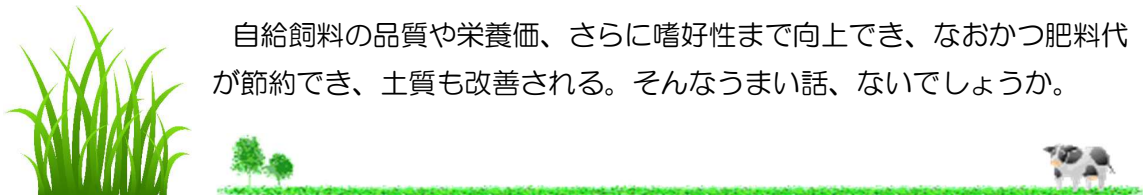


## 裸地に朱を灯す

自給飼料の品質や栄養価、さらに嗜好性まで向上でき、なおかつ肥料代が節約でき、土質も改善される。そんなうまい話、ないでしょうか。



ギシギシを駆除したばかりの草地、あるいは更新して数年を経た草地。こうした草地では裸地が目立ち始め、これを放置しておくとも再びギシギシが生えてきたり、シバムギなどの地下茎の雑草が侵入しやすくなります。その結果、植生を悪化させるばかりか、収量や栄養価、生乳生産性さえをも低下させます。

裸地が目立ってしまった草地は、オーチャード&ペレを追播すると、大変に結構な成果が期待されやすいのですが、一部の草地であっても3回刈りはしたくない・あるいはできないといった条件があれば、こうした対応は難しくなります。

そこで裸地比率がそれほど高くないのであれば、アカクローバを追播に価値が見いだせるケースも少なくないでしょう。

アカクローバはその宿命として3~5年で衰退します。そのため草地更新(造成)時

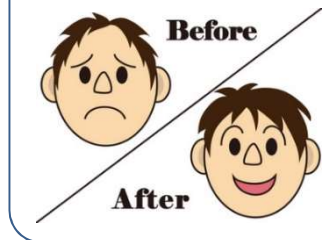


アカクローバ

の混播種子としてアカクローバを混ぜると、裸地ができやすく、あまり適当とは言い難い側面があります。その代わりに、裸地が目立ち始めた草地には、追播による定着の良いアカクローバはもってこいの草種で、追播後は収量・TDN含量とも向上します。

アカクローバは乳牛が多く食べやすい(O<sub>b</sub>が低

### 追播効果



い) ので採食量が増し、またカルシウム含量も一般的にはチモシーの3倍程度も期待されます。そしてシロとは異なりアカクローバは主根が深く土壌に入り込んで、硬盤層さえ突き抜けるので、土壌通気性の改善も期待されます。



アカクローバの根

マメ科の草(の根の根粒菌)には、人が大量エネルギーを使わないと固定できない空気中の窒素(N)を常温・常圧でいとも簡単にやってのける驚くべき能力があります。つまり草地にアカクローバのようなマメ科の牧草が増えると、散布すべきN肥料を減らすことができます。草地に3割以上のマメ科牧草が生育していれば、ほとんど見られない草地と比べ、必要とされるNはほぼ1/4。肥料代はかなりの節約となります。



自走ハーベスタによる収穫であれば、草地一面にアカクローバを追播しなくても、間をあけてシマシマ模様で播種しても構わないでしょう。収穫時に適当に混ざり合さえすれば、出来上がったサイロのサイレージの栄養価はバラつきません。

課題となることは、切り込みの場合は2番草が予乾しづらいこと、タンカル等の散布を怠らないようにすること、また数年後には衰退してくるので再び追播することです。手間やコスト以上のメリットは十分に見込まれそうです。

アカクローバの追播に大切なのは「段取り」です。草地の裸地の状況を確認しておき、場所とおおよその面積を把握しておきます。播種時期は1番牧草のあと(7月中)で、種子と播種機の手配しておきます。播種量は作溝法で1kg/10aです。



助言：雪印種苗(株)  
佐藤尚親主査

今年から気軽に目が通せる酪農技術の資料として「ちょっとした酪農のはなし」を随時、発行・配布いたします。

第一弾は牧草①。近日中にファイルともお届けする予定です。

